

ニューロ・ダイバシティと良心

— 自閉症を神経構造の個性・多様性として見る —

良心は画一的な行動や道徳的判断を促すものではありません。むしろ、それは人間精神の多様性を視野に入れた概念であることを明らかにするために、このシンポジウムではニューロ・ダイバシティに着目します。ジェンダー、民族性、性的指向や障害と同様に、神経学的差異を社会的カテゴリーとして認識されるべきことをニューロ・ダイバシティ運動は主張しています。たとえば、自閉症を神経学的な個性と見なすことによって、どのような世界が見えてくるのでしょうか。自閉症に新たな視点を与えた『ハイパーワールド——共感しあう自閉症アバターたち』『自閉症という知性』の著者・池上英子氏を講師としてお招きします。

● 日時：2019年7月8日（月）16:40 — 18:40

● 場所：同志社大学 京田辺キャンパス ことば 言館

● 講演：

池上英子（ニュー・スクール大学院 社会学部 教授）



貫名信行（同志社大学大学院 脳科学研究科 教授）



司会：小原 克博（同志社大学 神学部 教授、
良心学研究センター長）

コメンテーター：

板倉昭二（同志社大学 赤ちゃん学研究センター 教授）

武藤 崇（同志社大学 心理学部 教授）

■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター

CONSCIENCE

E-mail: rc-csc@mail.doshisha.ac.jp <http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

良心を世界に—良心を覚醒させる知の連携と知の実践 良心学研究センターは、現代世界における「良心」を考察し、その応用可能性・実践可能性を探求することを通じて、学際的な研究領域として「良心学」を構築し、さらにその成果を国内外に発信し、新たな学術コミュニティを形成することを目的としています。

講師略歴

池上 英子 (いけがみ・えいこ)

ニューヨークを拠点とする社会学者。現在 ニュー・スクール大学大学院社会学部 Walter A. Eberstadt 記念講座教授。同大学社会学部学部長。プリンストン高等研究所学際研究プログラム研究員も務める

歴史社会学者として、日本社会を比較文明的ネットワーク論的に見直す仕事で知られる。近年は仮想社会の研究にも力を入れ、感じかた見かたのマイノリティとしての自閉症スペクトラムの人々との仮想空間での交流を描いた書き下ろし『ハイパーワールド——共感しあう自閉症アバターたち』(NTT 出版) でニューロダイバーシティ (神経構造の多様化が、社会全体にとってプラスになる) との考え方を紹介した。

専攻は歴史社会学、ネットワーク論、文化社会学。New York 在住。しばしば東京、特に京都などにも出没。

お茶の水女子大学文教育学部国文学科卒業。日本経済新聞社勤務を経て筑波大学大学院地域研究科修士課程修了。フルブライトプログラムにてハーバード大学社会学部博士課程へ。1989 同大 Ph.D.取得。

日本文化をグローバルな文明的史観から分析してきた。著書に『名誉と順応——サムライ精神の歴史社会学』『美と礼節の絆——日本における交際文化の政治的起源』(共に NTT 出版)。

「名誉と順応」の英語原著 “The Taming of the Samurai” (ハーバード大学出版会) は 日本語のほか (邦訳: 森本醇)、スペイン語、ポーランド語、韓国語、中国語などに翻訳され、世界中の大学で使われている。

近刊に『自閉症という知性』(NHK 出版新書、2019 年 3 月) がある。

貫名 信行 (ぬきな・のぶゆき)

同志社大学大学院脳科学研究科 認知記憶加齢研究部門・教授

1977 年 東京大学医学部医学科卒業

1979 年 東京大学医学部神経内科入局、

アルツハイマー病病理、神経原線維変化の生化学的研究を行う。

1985-88 年 ハーバード大学リサーチフェロー

1988 年 東京大学神経内科 助手、講師、助教授

ポリグルタミン病の分子病態研究を開始

1997 年より理化学研究所脳科学総合研究センター・グループディレクター

構造神経病理研究チーム・チームリーダー

2012 年 10 月 順天堂大学神経変性疾患病態治療探索講座教授

2015 年 4 月 同志社大学現職

専門は病態脳科学・神経内科。特にポリグルタミン病の病態・治療研究を通して、より広汎な神経変性疾患の治療を目指している。

NY 在住の社会学者が考える、現代日本の閉塞感を突破するためのキーワードとは？

池上英子

ニューヨークの大学で教えるようになってから、もう 20 年ほどになります。

こちらの地下鉄は、日本的な基準からするとかなり汚くて狭い。しかし、そんな地下鉄がニューヨークの象徴とも言われているのは、多様な乗客たちが発生させる雑多なエネルギーのせいではないでしょうか。

車両のなかにはスイングして歩く高齢者シンガーもいれば、駅には大道芸人やミュージシャンたちの発する音が鳴り響く。多様な人がいて、それらの人々がものすごい勢いで交差する。ニューヨークに住むようになってから、ダイバーシティ（多様性）という言葉が創造性とリンクしていることが、身にしみて感じられるようになりました。

ダイバーシティというと、人種、文化、ジェンダー、セクシュアリティなどを連想される方が多いかもしれません。さまざまなマイノリティの「あるがままの価値」を発見し、配慮する。それはとても大事なことです。

しかしダイバーシティは、創造性の拡大を目指す社会にとっては積極的価値にもなるはずで。ですから私は、もし最近の科学的な知見に基づく概念のなかから、現代日本の社会的な閉塞感を突破するために有効なキーワードをひとつ挙げるとすれば、それは「ニューロ・ダイバーシティ」（神経構造の多様性）ではないかと考えています。

この言葉に従えば、自閉症スペクトラムや ADHD（注意欠陥・多動性障害）などの「発達障害」も、脳の正常なバラエティのひとつの形であるという発想、脳の個性であり特性だという視点につながります。

多くの方は、「発達障害」を医学的な見地から問題にします。もちろん「診断」や「医療」という角度は大切です。しかし、それでどれだけその「人」のことがわかるのでしょうか。

たとえば、自閉症当事者が見ている世界や経験には、美しい部分もあれば困難がつきまとう部分もあるでしょう。その両方を知ってこそ、その人を知ることにつながるのではないのでしょうか。いつしか私は、当事者の世界観をまるごと知りたいと思うようになりました。

今回出版した『自閉症という知性』は、そんな私の願いに応じて書かれました。焦点を当てるのは 4 人の自閉症当事者たち。これまでに交流を深めてきた数多くの当事者のなかから、国籍も認知特性のパターンも違う 4 人に協力してもらいました。

※NHK 出版ウェブマガジン寄稿記事より抜粋。

<https://www.nhk-book.co.jp/pr/magazine/interview/81.html>

ニューロ・ダイバーシティー思想・運動の衝撃——医療の立場から

貫名信行

ニューロ・ダイバーシティーという考え方は、病気（正常機能ができない状態）は治すべきだ（実際は治せないことも多いのだが）という考えを持つ医療の立場からすると衝撃である。本講演では、その衝撃をどう受けとめるか、次のような点について議論してみたい。

- 1) 医療は困っている患者さんを助けることを目指す。自閉症において困っている人は誰か？
- 2) ニューロダイバーシティーの基盤はなにか。
 - ・ ニューロダイバーシティーの支持者たちは自閉症や自閉症をとりまく社会状況を再概念化することを目論んでいる。すなわち、神経学的な違いは必ずしも治療される必要があるわけではないと知らしめること、……神経学的な違いを持つ人が自分自身の治療についてどんな治療を受けるかあるいは全く受けないかなどをより自由に選択できるようにすることを目指している。 (Wikipedia)
 - ・ ゲノム・ダイバーシティー
 - ・ 患者であることによって不利益を被らないこととの違い。
 - ・ 反精神医学運動との違い
- 3) 多様性とは何か
 - ・ モデル動物が示唆するもの
 - ・ ベルカーブ
- 4) 同志社とダイバーシティー

良心学研究センター主催 公開シンポジウムのご案内

■ 「見えないものを信じるころ——比較認知科学と教育学の視点から」

(赤ちゃん学研究センターと共催)

日時：10月17日（木）16:40 - 18:40

場所：同志社大学 今出川キャンパス 同志社礼拝堂

講師：松沢哲郎（京都大学高等研究院 特別教授）、近藤 卓（日本ウェルネススポーツ大学 教授）

コメンテーター：小原克博（同志社大学神学部 教授、良心学研究センター センター長）、板倉昭二（同志社大学赤ちゃん学研究センター 副センター長、専任フェロー教授）、日下菜穂子（同志社女子大学現代社会学部 教授）

※ 同志社大学 良心学研究センター編『良心学入門』（岩波書店、2018年）好評発売中。